

波と風



独立行政法人国立病院機構

呉医療センター・中国がんセンター

〒737-0023 広島県呉市青山町3-1 TEL0823-22-3111 (夜間・休日 TEL23-1020)
http://www.kure-nh.go.jp 発行責任者 呉医療センター院長 谷山 清己

2017
OCTOBER

vol.41



呉医療センター・中国がんセンター

理 念

Basic Principle of Our Hospital

相手の心情に寄り添う愛のある医療を
笑顔で実践します

*Practice medicine from the heart,
create smiles every day*

運営方針

Management Policy of Our Hospital

LOVE and SMILES

Live healthy	健康な人生を応援します
Own your personal health	疾病予防を支援します
Value an amiable, cordial atmosphere	いかなる暴言・暴力も許しません
Ensure effective medical services	安心・安全で効果的な医療を目指します
Accelerate good work practices	働きやすい職場環境を促進します
Nurture quality hospital management	健全な病院運営をします
Demonstrate partnership with local medical services	地域医療と緊密に連携します
Secure safety first	安全を最優先します
Minimize adverse events	副作用や合併症を最小限にします
Invest in staff education	優秀で国際的な医療者を育成します
Lead in life expectancy results	人命を尊重します
Engage and care for patients	相手の心情に寄り添います
Surpass expectations	チーム医療をおこないます

C O N T E N T S

- P.2 就任挨拶(総合診療科科長)
- P.3 診療科紹介 泌尿器科
- P.4 診療科紹介 内分泌・糖尿病内科
- P.5 診療科紹介 腫瘍内科
- P.7 職場紹介 臨床検査科(血液検査)
- P.8 職場紹介 7 B病棟
- P.9 呉医療センター・中国がんセンターでは
病院見学会・インターンシップを積極的に実施しています
- P.10 第10回 呉国際医療フォーラムを開催して
- P.11 The 10th Kure International Medical Forumの初日行事、
海外参加者(ゲスト)の院内見学について
- P.12 K-I-N-Tに参加して(呉看護学校)
- P.13 宿泊研修に参加して
- P.14 第52回 学校祭を開催しました
- P.15 オープンスクールを開催しました
- P.16 インドネシア ウダヤナ大学 整形外科・外傷外科学教室からの留学生
- P.17 「ボランティアイベント 山本恵美子押し花作品展」を開催しました
- P.18 The 18th Annual Pediatric Meeting of National Child Healthに参加して
- P.19 呉市総合防災訓練に当院DMATが参加しました。
- P.20 当センターと中華人民共和国・首都医科大付属世紀壇病院(北京市)
との姉妹縁組締結について;内視鏡治療の技術提供に向けて
- P.21 うちの部署の接遇キラリさん
- P.22~23 私たちモデルナースです
- P.24 誕生日ケーキで患者さんを笑顔に
- P.25 連携病院紹介(佐々木内科・呼吸器科クリニック)
- P.26 がん相談支援センターの紹介
- P.27 緩和ケア認定看護師の活動を紹介します
- P.28 呉医療センター・中国がんセンターの行事紹介
- P.28 編集後記



就任挨拶

この度、呉医療センター・中国がんセンター 総合診療科へ科長として着任いたしました中村浩士（なかむらひろし）と申します。呉地区における総合診療と地域医療に少しでも貢献できればと考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。私は山口大学医学部第二内科並びに地域医療推進学講座での勤務の後に、平成27年に広島大学病院総合内科・総合診療科（田妻進教授）に入局後、大竹市にある国立病院機構 広島西医療センターの総合診療科開設の役を拝命いたしました。読者の方で“総合診療科は何をする科かよく分からない”という方は多いと思います。そこで、この2年間における私の広島西医療センター・総合診療科の取り組みについて簡単にご紹介しようと思います。広島西医療センター赴任後に最初に行ったのは、“病院の入り口整備”でした。大学病院をはじめとして大病院では、高度に専門科した医療に対応するため臓器別専門科が設置されています。専門科へ受診する際には、かかりつけ医からの紹介状が必要であることが多いのが実状です。しかしながら、体調不良にも関わらず、初診であるがために何科に受診したらよいか分からない方も多くおられるかと思います。そのような方が病院を受診される場合には、総合診療科を受診して頂くと、問診、身体診察、検査などを経た後に、院内外の専門科へ紹介することが可能となります。そこで総合診療科外来を月曜日から金曜日の毎日開設することで、初診（ウォークイン）や何処の科に受診したらよいか分からない患者さん方の利便性を図りました。より早く診断して具体的方向性を示してあげることで、患者さんの利便性を図りました『人間中心の医療・ケア』（総合診療医のコアコンピテンシーより）。次の取り組みは“病院の出口整備”でした。前述の取り組みにより総合診療科の外来患者、入院患者数（平成28年度は前年度比で約1.3倍）も年々増加しましたが、非DPC病院の性質上、長期入院や社会的入院も増加してきたため、急遽当科にて訪問診療と往診、レスパイト入院を導入し、在院日数の減少に努めました（平成27年度17.5日⇒平成28年度16.7日：総合診療科のみ）。この取り組みは、厚生労働省が推進している『医療から介護へのシームレスなサービスの提供』や『地域包括ケアシステムの構築』にも一役買ったのではないかと自負しております。何よりもご

総合診療科科長 中村 浩士

自宅に伺った際の患者さんとそのご家族の満足度が毎回非常に高かったのが印象的でした。また、訪問診療時には必ず初期研修医と認定看護師（JNP）も同行することで、地域医療とチーム医療を直に学習してもらうこと出来ました『卒後臨床教育の実践』。

上記は一例ですが、実は“総合診療科に出来ることは無限にある。”というのが私の答えです。しかしながら、総合診療科の未来を作っていくのは、患者さんを中心とした地域の方々と、病院内外の多くのスタッフ方々との連携に掛かっていると思います。限りある医療資源を適切に使用するのも、総合診療科の大きな務めです。皆様どうか宜しく申し上げます。



第31回広島みかんマラソン大会(江田島市)にて
5 km一般男子の部:第5位

診療科

紹介



腎臓癌について

泌尿器科科長 繁田 正信

腎臓には腎臓の実質（尿を産生する部分）と尿を運ぶ（腎盂、尿管）尿路に分けられ、腎臓実質に出来る癌を腎臓癌と言います。しばしば混同されますが、腎盂や尿管に出来る癌は腎盂癌、尿管癌と呼び、腎臓癌とは全く別の種類の癌で、治療方法も異なります。今回、腎臓癌についてお話をします（図1）。

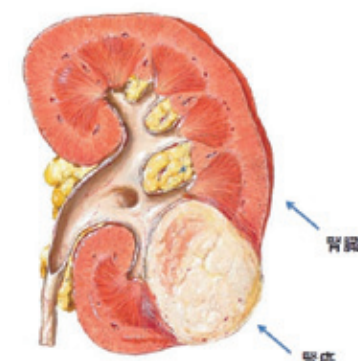


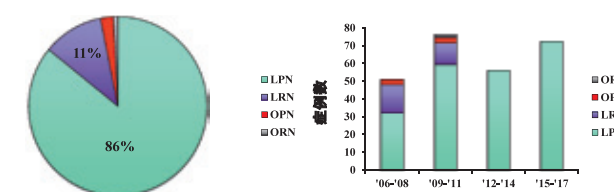
図1、腎臓癌とは

近年、腎臓癌の手術方法が変わってきています。腎臓癌の手術には患側の腎臓全摘除（根治的腎摘除術）と腫瘍とその周囲の腎実質を付けた部分切除（腎部分切除術）があります。腎部分切除術の方が技術的に難しいこともあって、昔は腎臓癌の標準的治療方法はどのような大きさの癌であっても、患側腎臓全摘除が標準術式でした。しかし、最近、根治的腎摘除術も腎部分切除術も癌の治療成績には差がないことが分かり、逆に腎臓が1個になることで腎機能が低下し、そのために動脈硬化等、他の全身疾患が進行し、結局、寿命が短くなる、との報告がなされ、術式が一変しました。今では極力、腎部分切除術を行い、腎機能を温存し、最小限の腎機能低下にとどめることが必要とガイドラインにも明記されています。もちろん、腫瘍の大きさや場所により、全ての腎臓癌で腎部分切除術が出来る訳ではありませんが、当院では全国的に見ても稀な割合で腎部分切除術を行っています。また、開腹術と腹腔鏡手術の選択も話題の一つです。開腹術では大きな傷が残りますが、腹腔鏡手術ですと基本的には穴を数カ所あけて手術し、摘出した物を体外に取り出すために必要最小限の傷を作るため、患者さんの受けるダメージは相当軽いものになる反面、高度な技術が必要とします。特に腎部分切除術は最も難易度の高い術

式の一つです。比較的小さな腎臓癌の場合、腹腔鏡手術で腎部分切除術を行うのが、患者さん側から見ると理想なのですが、術者の技量により、その手術適応はかなり差があります。当科は腹腔鏡下腎部分切除術に関して、本邦でトップクラスの症例数および手術成績を有しており、転移のない腫瘍径4cm未満の腎腫瘍の86%に腹腔鏡下腎部分切除術が施行されており、特に2012年以降、全例腹腔鏡下腎部分切除術で治療しています（図2）。また通常の病院では腎臓を摘出される様な、転移のない腫瘍径が4cmより大きな腎腫瘍に対しても全体の43%に腹腔鏡下腎部分切除術が施行されており、特に2012年以降は大半でこの術式が選択されています。まさに技術の集大成と言った所です。また、当院の腹腔鏡下腎部分切除術の手術成績はロボット手術を上回る物です。

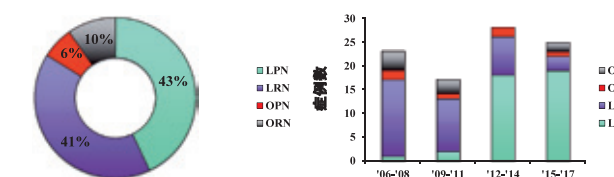
ご本人、ご家族、知人の方が腎臓癌と言われたら、ぜひご相談ください。

図2、転移のない腫瘍径4cm未満の腎腫瘍255例に対する術式の選択
2006/6 - 2017/3



ORN: 開腹根治的腎摘除術、OPN: 開腹腎部分切除術、
LRN: 腹腔鏡下根治的腎摘除術、LPN: 腹腔鏡下腎部分切除術

図2、転移のない腫瘍径4cm以上の腎腫瘍93例に対する術式の選択
(2006/6 - 2017/3)



ORN: 開腹根治的腎摘除術、OPN: 開腹腎部分切除術、
LRN: 腹腔鏡下根治的腎摘除術、LPN: 腹腔鏡下腎部分切除術

診療科 紹介



当科における糖尿病と甲状腺疾患の治療への取り組み

内分泌・糖尿病内科科長 久保田 益亘

現在、内分泌・糖尿病内科には3名の医師が在任し、外来・病棟で糖尿病・内分泌疾患の患者さんの診療を担当させていただいております（図1）。糖尿病は病態が多様であり、患者さんの年齢、臓器合併症、仕事、家庭環境、認知機能などにより、最良の治療が異なることが多いのが特徴です。また、糖尿病治療は、長期に亘り患者さんと共に継続する必要があります、患者さんに能動的に治療に参加していただかなくては、うまくいきません。そのため、当科で取り組んでいる点をご紹介します。

図1: 呉医療センター内分泌・糖尿病内科

	久保田 益亘	日本糖尿病療養指導士(CDEJ) 薬剤師: 1名 看護師: 2名
	吉井 陽子	病棟 4B
	佐川 純司	メディカルクラーク3名
(外来担当) 久保田(月曜午前・午後、水曜午前・午後、金曜午前) 吉井(火曜午前、金曜午前) 佐川(火曜午前、木曜午前) 透析予防外来: 毎週水曜日		

[病診連携を活かした糖尿病治療]

厚生労働省の平成26年(2014年)「国民健康・栄養調査」によると、糖尿病有病者(糖尿病が強く疑われる人)の割合は、男性で15.5%、女性で9.8%であり、2006年調査に比べ増えています。この調査によると糖尿病は50歳を超えると増えはじめ、70歳以上では男性の4人に1人(22.3%)、女性の6人に1人(17.0%)が糖尿病だということです。つまり、近年糖尿病は、私達の身近にある病気となっています。糖尿病と他の疾患の最大の違いは、糖尿病は発症直後には、特段症状を持たないことが多いため、治療の開始と継続の必要性をしっかりと理解していただくことが難しい点だと感じています。しかし、血糖のコントロールの悪い状態を長期間放置すると、神経障害、網膜症、腎症といった糖尿病合併症が進行し、心肺機能の低下、視力低下、腎機能の低下などにより、生命の予後にも関わってきます。このことから、糖尿病の重症度に関わらず、検診などで糖尿病を指摘された時などの病初期が、糖尿病治療の勝負時だと考えています。病

初期に糖尿病に対し、しっかり向き合い、理解していただき、病態に合った治療を受けていただくことで、その後の患者さんの生活の質を大きく改善させることができるのではないのでしょうか。

普段、自覚症状のない患者さんにコンスタントに外来へ来て頂くことは、我々糖尿病内科医の責務だと感じております。しかし、患者さんには働き盛りの方や家事や介護などで多忙の方も多く、病院になかなか受診できない方が多くおられます。そのため、病初期に、まず当院へかかりつけ医からご紹介していただき、糖尿病教育入院(図2)にて病初期に糖尿病への理解を深め、退院後は状況をみながら、再度通院しやすい、かかりつけ医へ受診していただく地域連携が推進できれば、より多くの糖尿病患者さんの予後を改善できるのではないかと考えております。

図2: 糖尿病入院クリティカルパス(13日間)

看護師	血糖測定 糖尿病手帳 低血糖対処法 足病変のチェック	低血糖・高血糖の症状 運動についての説明	シックデーの対処法 フットケアについて 糖尿病合併症について
栄養士	食事指導(栄養科) (個人栄養指導2回・集団栄養指導1回・必要に応じカーボカウント指導)		
薬剤師	病棟薬剤師から服薬指導 インスリン自己注射指導 血糖自己測定の指導		
理学療法士	運動療法 集団指導(リハビリ科)		
医師	胸部レントゲン	血糖6検	腹部超音波検査 必要に応じCT検査
	心電図	食前・食後2時間 血中Insulin測定	心臓超音波検査 上部下部内視鏡検査
	CAVI・ABI	普尿検査 (Cペプチド)	頸動脈超音波検査
	便潜血 眼科受診 体組成検査	眼科受診 (網膜症)	2週間で血糖コントロールのみならず、 糖尿病知識、インスリン・血糖測定手技の習得 合併症の精査を行うプログラムになっています！

[難治性のバセドウ病に対するアイソトープ治療]

バセドウ病は、甲状腺を異常に刺激する物質(TSHレセプター抗体といいます)が体内で作られ、この物質がどんどん甲状腺ホルモンを大量に作らせてしまう病気です。男性より女性に多くみられます。200～400人に1人の有病率だといわれています。他の自己免疫疾患と同様に、なぜこの抗体が作られてしまうのかはわかっていません。原因が不明のため、根本的に治療するのは難しいこともありますが、適切な治療を受けて甲状腺ホルモンをコントロールしていれば、健康な人と変わらない生活ができます。

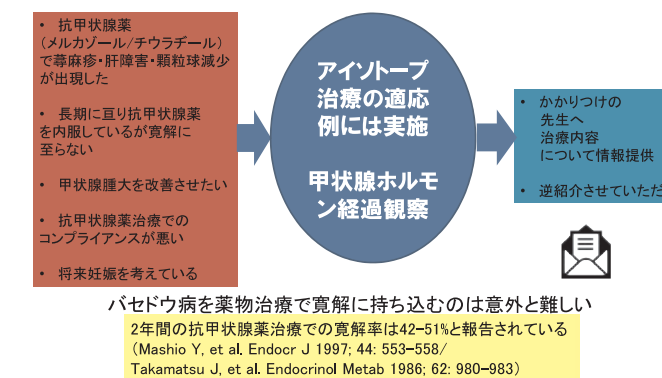
しかしながら放置しておくと、心臓病(不整脈や心不

全)、甲状腺クリーゼのような命に関わる病気を引き起こしたり、女性では流産や早産の危険が高くなったり、胎児に影響することもありますので、早期に発見し、きちんと治療することが大切です。

当院は、バセドウ病に対するアイソトープ治療(^{131}I 内用療法)を呉医療圏で唯一施行できる施設になっております(図3)。アイソトープ治療は、初回治療としては、国内では選択率は低いですが、米国では初回からアイソトープ治療を行うことが多く、比較的 안전한治療として認知されております。アイソトープ治療の適応者として、チアマゾールやプロピルチオウラシルなどの抗甲状腺薬を長期に内服してもバセドウ病の寛解が得にくい場合、抗甲状腺薬による重症蕁麻疹や無顆粒球症、肝障害などの副作用が生じたケースが多いと思われます。本年4月から当科にてアイソトープ治療を施行した12例の内訳は、男性4例、女性8例、平均年齢54歳であり、長期の抗甲状腺薬にて寛解が得られなかった症例が7例、抗甲状腺薬により副作用が生じた症例が4例(蕁麻疹が3例、肝障害が1例)、初回治療として選択したケースが1

例でした。2年間の抗甲状腺薬治療でのバセドウ病の寛解率は42-51%と報告されており、案外低いことが分かります。バセドウ病治療でお悩みの方は、一度当科へ受診していただければ幸いです。

図3: バセドウ病の地域連携



今後とも呉医療センターにおける糖尿病・内分泌疾患の診療へ微力ながら努力精進する所存でございますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

診療科 紹介



腫瘍内科について

腫瘍内科科長 平田 泰三

【はじめに】

腫瘍内科という科をご存じでしょうか。近年、「がん」による死亡数は上昇しており、日本人の2人に1人ががんに罹る時代になっております(図1)。その中で、腫瘍内科は、抗がん剤治療を中心に、「がん」に対して内科的に関わっていく診療科です。今回は腫瘍内科についてご紹介させていただきます。

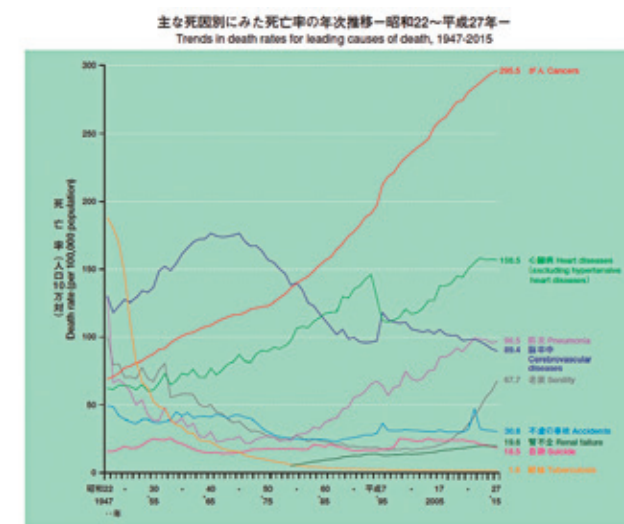


図1

【腫瘍内科とは】

抗がん剤治療は近年では大変進歩が目覚ましく、これまで治療が難しかった病気でも飛躍的に治療効果が得られたり、また完治する可能性をさらに高めることができます。ところが、抗がん剤治療は、副作用もあり、時に重篤な副作用をもたらすこともあります。一方、安易に使用する量を減らしてしまうと、今度は効果がなくなってしまうため、厳密な管理が必要な治療です。当科では抗がん剤治療を受けられる方にとって治療の効果を最大限に引き出し、副作用に対しては、適切な副作用を抑える対処法を実践することにより、患者さんの生活の質を高めながら治療を行うのが我々の役目です。

【チームでサポート】

「がん」は身体的にも、精神的にも大きな影響を与える病気でありながら、日本人のがん患者数は依然、増えています。一方で、「がん治療の専門施設が地域にない」、「専門医師がいない」という問題がありました。当院は中国がんセンターとして、経験豊富で、専門性の高いがん治療のスタッフを数多く擁してこれまでがん治療の拠点病院として、その役割を果たして参りました。その中で、最善のがん診療を行っていくには「チーム医療」が大切と考え、外科医、内科医、放射線治療医、緩和ケア医、精神科医などの各領域専門医師、看護師、薬剤師、ソーシャルワーカー、栄養士など多岐にわたる職種とともに診療を行っています。（図2）

また、患者さんの個々の悩み・心配事はそれぞれに違いますので、その方に合ったサポートをチームで対応し、患者さんのQuality Of Life「生活の質」を最大限に大切にしよう心がけております。



図2

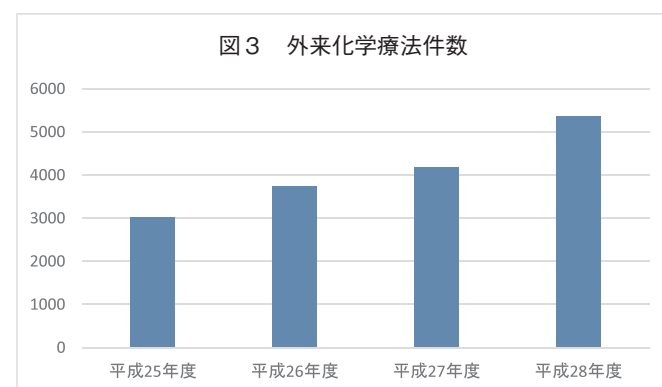
【外来化学療法センター】

近年、がんの化学療法においては新しい抗がん剤や分子標的剤の登場、支持療法の発達により 外来で抗がん剤治療（外来化学療法）を受けるのが一般的になってきました。外来で治療を受けることにより患者さんの「生活の質」を保たれるということも重要なポイントと考えております。当院ではこの外来化学療法を「外来化学療法センター」にて行っております。外来化学療法センターでの抗がん剤治療の実施件数は図3にありますように年々増加しております。外来化学療法センターには、日本臨床腫瘍学会 がん薬物療法専門医・指導医、専門の看護師、専門の薬剤師が常駐しており、各自の専門性を活かしながら様々な部署と連携を密にとり、抗がん剤治療を受けられる患者様が「安全に、快適に、安心して」治療を受けて頂けるように、チームで副作用の発現予防や症状緩和だけでなく、心理的な支援や社会的な支援を行っております。

【最後に】

我々は、個々の患者さんに最適な抗がん剤治療を行わせて頂くだけでなく、個々の事情に合わせた、よりきめ細かい治療や支援を行っております。

また、がんに対する治療は日本国内に専門家が少ないため、セカンドオピニオンやがんの治療方針に対する相談など、さまざまな悩み・相談にも丁寧に対応致しております。



職場紹介

臨床検査科（血液検査）

臨床検査科血液主任 宮崎 純子



臨床検査科の業務は大きく2つに分けられます。1つは患者さん自身の身体を調べる検査で、生理検査といいます。心電図、超音波、脳波などがあります。もう1つは患者さんから採取した血液や尿などを調べる検査で検体検査といいます。検体検査はさらに感染症の原因菌を調べる細菌検査、血液中の酵素・血糖値・脂質などを測定する生化学検査、そして血球の状態を調べる血液検査に分けられます。

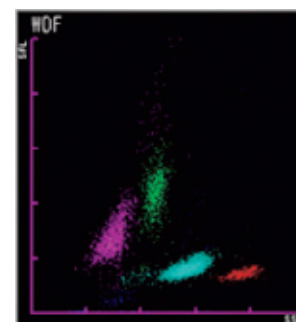
血液検査では赤血球、白血球、血小板を測定します。それぞれ役割が異なり、赤血球は酸素の運搬、白血球は生体防御に関する免疫反応、血小板は止血の役割を担います。

これらの血球を自動血球分析装置XN-9000という機械で測定します。

赤血球、白血球、血小板の数や大きさを測定し、異常がないかを調べます。白血球は好中球、好酸球、好塩基球、単球、リンパ球にわけられ、どの細胞が多いかによって疾患を推測できることもあります。たとえば、好酸球が多い時はアレルギー疾患、リンパ球が多い時はウイルス感染などです。

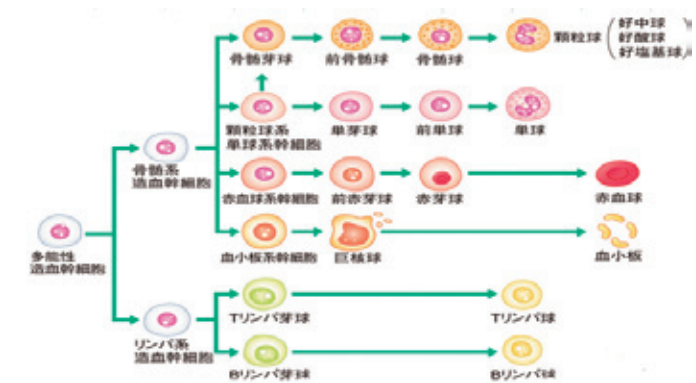


自動血球分析装置 XN-9000
赤血球、白血球、血小板、白血球分類の測定をします



スキャッタグラム
白血球の大きさ・内部構造によって、好中球・好酸球・好塩基球・単球・リンパ球に分類されます

白血球の分類はスキャッタグラムからもある程度は解りますが、より確実なものにするために血液塗抹標本作製し、細胞を顕微鏡で観察します。ここで形態に異常があり、血液疾患が疑われるときは骨髓穿刺を行います。骨髓穿刺とは腸骨という腰の骨に針を刺し、骨髓液をとる検査です。なぜ骨髓の検査をするかという、血液細胞は骨髓で作られるからです。骨髓を検査することにより、造血能や血球の成熟度、異常細胞の有無を調べることが出来るのです。



血球の分化
骨髓で造血幹細胞より、骨髓系とリンパ系の細胞に分化します。骨髓系はさらに顆粒球系・単球系・赤血球系・血小板系に分化し、成熟した細胞が血液に放出されます。

骨髓穿刺を行った患者さんの標本は毎週のカンファレンスで症例検討を行っています。



血液内科カンファレンス

職場紹介

7B病棟紹介

7B病棟 看護師長 池田 知子



この度、4月より7B病棟に看護師長として着任致しました池田です。私の出生は呉市で、親戚も呉に在住しており、何かと呉には縁があります。6年前に呉医療センターに研修で来て、11階の食堂で昼食をとり、海と島と山のコントラストがよく、山育ちの私にとって、最高のビジョンであったのを覚えています。そんな思い出がある中で、この度、呉医療センターで勤務することになり、これも何かの縁だと感じています。私のモットーは「明るく元気にいつも笑顔で♪」です。この元気と笑顔をいつでも皆様にお届けできれば、私の励みにもなります。スマイルゼロ円。元気注入に参りますので、いつでもお声をお掛けください。さて、そんな私が勤務している病棟を紹介します。

7B病棟は呼吸器内科、神経内科、眼科の混合病棟です。病床数は55床で、主な疾患は肺炎、肺腫瘍、脳梗塞、白内障などです。呼吸器内科では肺炎の治療、人工呼吸器を装着した方や抗がん剤治療、疼痛コントロール、神経内科では脳梗塞や多発性硬化症・筋萎縮性側索硬化症の治療やリハビリ、眼科では手術など急性期から回復期など、終末期と幅広い治療・看護をしています。スタッフも元気いっぱい患者さんに最善で最新の治療・看護を提供しています。

病棟には医師や看護師だけではなく、看護補助者、薬剤師、理学療法士、栄養士、緩和チーム、ソーシャルワーカーなど、様々な職種の元、日々の治療や看護が行われています。その中の一つにNST(栄養サポートチーム)があり、主に患者さんの栄養状態の評価を行っています。栄養の摂取には嚥下(飲み込む)行為がありますが、この嚥下の評価も重要なポイントになります。そんな中、この度、当病棟看護師の富中香那が摂食嚥下障害認定看護師試験に合格しました。患者の嚥下に対する悩みや問題点など、言語聴覚士と協力しながら、嚥下評価や嚥下リハビリの介入を行っていきます。どうぞ、よろしくお願い致します。



看護師・医師・看護補助者・看護学生 はい！ポーズ

「作業中」の札を下げて内服薬の整理中。
【私に話しかけないで！】
間違いのないように作業しています。



呉医療センター・中国がんセンターでは 病院見学会・インターンシップを積極的に実施しています

副看護部長 服部 有希



平成29年3月～7月の期間で病院見学会・インターンシップを実施し67名の参加がありました。
看護学生は、看護師の話を熱心に聴き、ケアを実践しながら楽しく参加しています。内容をご紹介します。

病院見学会

開催日：随時

内 容：

12:30～13:00 オリエンテーション

13:00～13:15 病院・看護の概況



13:15～13:30 院内教育についての説明

13:30～14:20 病院内見学ツアー



楽しく病院全体を案内します。
院内の雰囲気を
感じてください

14:20～15:30 先輩ナースに聞こう！



ツアーの途中で、
学生の希望病棟に
たち寄ります。

病棟の看護師から、看護の楽しさ
病棟の特徴について紹介しています。

インターンシップ

開催日：随時

場 所：原則として本人の「希望する部署」とします。

内 容：

9:00～9:30 オリエンテーション

9:30～10:00 病院・看護の概況

10:00～11:00 更衣・病棟案内

11:00～12:00 **看護体験**
(清潔ケア・食事介助・移動等)

看護師と一緒にケアを通じて
看護の実際を
体験できます



12:00～13:00

休憩
担当Nsと
一緒に**スタバランチ**♪

13:00～15:00 **看護体験**



15:00～15:30 意見交換

知りたいことが何でも質問ができ、
優しく丁寧に教えて頂いた



学生の声

新人看護師がわからないことに対して、先輩看護師と一緒に考える様子を見て、関係性がよく、教育がしっかりされていると感じた



第10回 呉国際医療フォーラムを 開催して

呉国際医療フォーラム事務局 事務局長 山下 芳典
スタッフ 岸田 直子

呉国際医療フォーラム（K-INT）とは、年に一度、当センターで開催される国際学会です。毎年、近年の医学の進歩に焦点を当てたテーマを決めてアジアを中心とする国々から専門家を招きます。参加者同士の討論や交流を通じて、呉地区の医療レベルの向上に寄与しています。

今年、K-INTは記念すべき第10回目の節目を迎え、7月13日から16日の4日間にわたり盛大に開催されました。今回のテーマは「Advances in Cancer Therapy Over the Next Ten Years ～がん治療の進歩：10年後への展望～」でした。海外からは、タイを始め、インドネシア、シンガポール、マレーシア、韓国、台湾、ベトナム、イギリス、中国、そしてアメリカから31名のゲストが参加し、真剣な討論と情報交換、そして心温まる交流が行われました。

7月13日に行われた行事については次ページの記事をご参照下さい。翌14日に行われたK-INT開会式では来賓の呉市長代理の呉市福祉保健部釜田宣哉部長（写真1）、呉市医師会 原 豊会長（写真2）、国立がん研究センター先端医療開発センター 落合淳志センター長（写真3）、広島大学大学院 安井 弥教授（写真4）から祝辞をいただき、谷山清己会長（写真5）が第10回K-INT開会を宣言しました。

14、15両日に開催されたシンポジウムと特別セッションでは、院外から広島赤十字・原爆病院 藤田直人部長（写真6）、広島大学病院 杉山一彦教授（写真7）、広島大学大学院 安井 弥教授（写真4）を座長としてお迎えし、闊達な議論が繰り広げられ、森脇副会長（写真8）の開会の辞にて盛会のうちに終えることが出来ました（写真9）。

最終日の16日には、次回K-INT（平成30年7月27～28日の予定）についてディスカッションが行われ、過去の良き伝統を踏襲しつつ新しいチャレンジも取り入れ、より有意義な会とすべく、次回へ向けて第一歩を踏み出しました。今年参加して下さった方、および残念ながら不参加だった方にも、一層魅力ある企画を披露したいと考えております。

最後になりましたが、K-INT開催にあたり、来賓の方々へ感謝するとともに各部署の方々、ならびに看護学校の先生方と生徒の皆さんのお手伝いにご協力に対し、深くお礼を申し上げます。ありがとうございました。



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6



写真7



写真8



写真9

The 10th Kure International Medical Forumの初日行事、 海外参加者（ゲスト）の院内見学について

呉国際医療フォーラム事務局 事務局長 山下 芳典
スタッフ 岸田 直子

平成29年7月13日から4日間にわたり第10回呉国際医療フォーラム（K-INT）が開催されました。数あるK-INTの行事の一つとして、13日（木）に海外参加者（ゲスト）を対象に行われた当センターの院内見学について報告します。

ルートは参加するゲストの専門を考慮し、

- ① 正面玄関ホール、当センターの歴史紹介パネル
- ② 外来棟（小児科）
- ③ 内視鏡センター（写真1）
- ④ 臨床検査科、病理診断科
- ⑤ 病棟（救急（3A、写真2）、小児科（4B、写真3）、整形外科（5A、写真4）、緩和ケア（10A、写真5））
- ⑥ 屋上ヘリポート
- ⑦ 食堂（昼食を兼ねて）
- ⑧ 相談支援室
- ⑨ 技術研修センター（写真6）

でした。参加者には英語版のフロアマップ（図1）を配布し、機能的に配置された病棟を見学しました。

この院内見学は、同行する通訳が各診療科や病棟スタッフの解説を訳すのではなく、スタッフ自らが自分たちの職場と業務を英語で紹介することが特徴です。日頃何気なく行っている業務も改めて英語で解説すると難しいものですが、説明用の写真付き資料を作成したり、実際の機器を示したりする工夫がありました。そのため、和気あいあいとした雰囲気の中で呉医療センター・中国がんセンターの特長を十分にアピールすることができま

した。また当日は天候に恵まれ、緩和ケア病棟の庭園や呉湾と呉市街の眺望が素晴らしく、当センターの魅力が一層引き立ちました。

見学中ゲストからの質問が予想以上に多く、限られた時間の中でヒヤヒヤする場面もありましたが、当センターに興味を持ってご質問を頂くことはとても嬉しいことでした。今回のゲストが帰国した後、どのようにこの体験を広めて下さるかも楽しみです。

最後になりましたが、通常の業務と並行して準備を進めていただいたスタッフの方々、並びに通訳サポートの研修医の先生方に、この場をお借りし厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

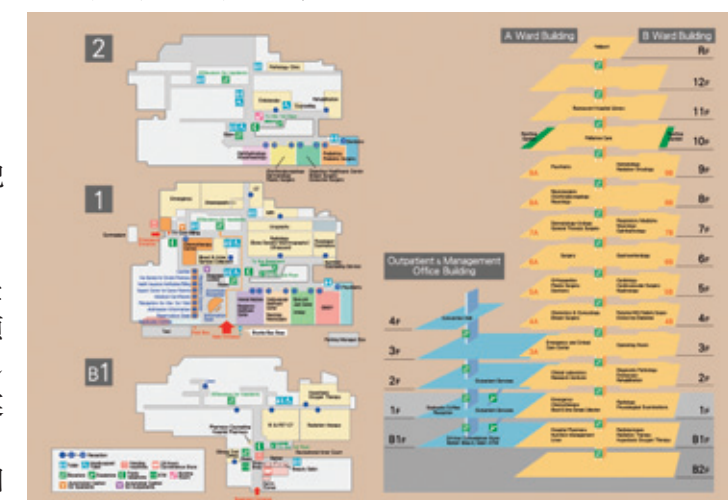


図1



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6

K-INTに参加して

国立病院機構呉医療センター附属呉看護学校

《応援団》 2年 中光 朱音

今年の応援団は、例年の力強さを前面に押し出した振付を修正し、少し柔らかさを取り入れました。新しい振付で練習している間は、なかなかポーズが決まらなくて、これでいいのかと悩むことも多かったのですが、練習を重ねていくうちに、形がびたりとそろっていき、どんどん応援団として、成長していく実感がありました。「この新生応援団で、できるところまでやりきろう!!」という思いで臨んだスポーツ交流大会で3年ぶりに首位を奪還できました。



今年は、アメリカ在住のY先生が、参加したいと申し出て下さり、事前に画像を送り、当日は、1時間程度みんなで振付を合わせました。わずかな練習時間で先生はほぼ完璧に踊ってくださり、素晴らしい出会いを通し貴重な体験ができました。

呉の看護学校で行っているこんな小さな部活がアメリカまで届くのだと、グローバルになったなとみんなで驚くと共に大きな喜びを感じました。K-INTに参加して下さった皆様方と短い時間ではありましたが交流でき、とてもよい思い出になりました。

《茶道部》 2年 福場 なつみ

第10回K-INTでは、茶道部として海外の方にお点前を披露し、お茶を振る舞いました。普段学校で練習してい

るお点前を披露できる良い機会であると同時に、海外の方にお茶を飲んでいただくことで、日本の文化を肌で感じ、日本を知っていただく良いきっかけになったと感じています。



また、おみやげとして、折り鶴と黒文字入れ(和菓子を食べる時に使うもの)を渡した際には、とても喜んでいただけて嬉しかったです。短い時間でしたが、海外の方とコミュニケーションをとり、お茶を飲んでいただけたことはとても良い経験となりました。

《宮島観光～おもてなし～》 2年 前田 菜々子

今回初めて、K-INTの宮島観光に参加させて頂きました。私は英語が全く話せません。

しかし、学会に参加された外国の方々と言葉だけではなく、表情や手振りでコミュニケーションを取ることができ、楽しく宮島を案内することができました。また、海外の看護師の状況についても教えてもらい、学習の一環にもなりました。

外国の方々とは、K-INTが終わった今も連絡を取って楽しくやりとりをしています。参加しなければできない貴重な体験です。思いきって参加して本当によかったと思いました。



宿泊研修に参加して

事務部企画課 業務班長 竹内 亘弘



さる6月23日(金)～24日(土)の2日間に亘り、蒲刈町にある県民の浜において行われた病院宿泊研修に参加しました。

私は今年赴任2年目であり、本来は昨年参加するべきだったのですが、企画課内で赴任者が3名おり全員が参加するのめどうかという話になり、私が2年目に参加することとなりました。

正直に言うところ知らない方が多かったこともあり、あまり気乗りせず入船山記念館前の送迎バスに乗り込んだことを覚えています。

しかしながら、研修参加者は積極的な方が多く、コーチング研修がグループによる検討、実演が大半を占めたこともあり、非常に面白く有意義なものでした。自分も上司役として演技を行ったのですが、グループ内での検討にないアドリブを連発し何とか乗り切ったことが昨日のことにように思い出されます。

また、五行に基づく才能特定・育成プログラムであるTalent Focusについても講師から少しお話があり、事前に研修生は木、火、土、金、水のどの五行であるかをテストしていました。自分がどれに属し、相手がどれに属するかによって、相性や、指導方法、接し方を変えろという考え方に非常に感銘を受けました。今後、取り入れていく企業等も増えるかもしれないとも感じました。

昼食では一風変わったお好み焼き、夕食は盛りだくさんの料理。食べ物(量)にうるさい私も非常に満足しました。

研修の最後、グループ賞の副賞としてちりめんじゃこのようなものをもらったのですが、ご飯に混ぜ家族で食べたところ、とてもおいしかったです。

当研修に参加させていただき、ありがとうございました。また、私と同じグループになった皆様、「木」「プロモーター」タイプである私の着火的発想につきあっていただき、ありがとうございました。



第52回 学校祭を開催しました

呉医療センター附属呉看護学校



6/24(土)に第52回学校祭を開催しました。テーマは、「Realize one's ideals ～理想の現実～」です。約400名の地域の方に来校していただき、呉看護学校での学校生活を知っていただく機会となりました。

茶道部のお茶席は、毎年とても人気があります。目でお茶を点てていただき、美味しいお菓子と一緒にいただきます。お茶席のテーマは「七夕」です。お茶席へようこそ！涼味いっぱいです。



屋台では、焼きそば、から揚げ、大学芋、クレープなどを販売しました。たくさんの方に喜んでいただくことができました。ポップコーンやマドレーヌ、クッキーのコーナー甘いキャラメルの香りが漂っています。



呉看護学校では、1年生が企画するお化け屋敷が人気です。学生が幽霊になりきっておどかすので、とても怖いです。お化け役も演技賞ものです！

さらに、講義で習った足浴を披露し、地域の方に実際に足浴の気持ちよさを体験していただきました。また、「地域の方の健康応援隊」として、身長・体重や血圧などを測定値を記入した「健康手帳」を来場者の方々にお渡しさせていただきました。小さなお客様のため、ボウリングや輪投げ、お菓子を準備しました。



オープンスクールを開催しました

呉医療センター附属呉看護学校

7/15(土)・16(日)に全学年が携わるオープンスクールを開催しました。

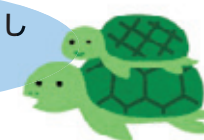
参加者は、200名余りで、暑い中、熱心に看護学校ならではの看護技術体験や学校説明会、学校紹介、学生交流会、寮見学、進路相談等体験してもらいました。

中でも、看護技術体験では入学後に行う学習を理解してもらうため、看護技術の大切さを理解してもらうために、多くの技術を計画しました。参加者の皆さんは、暑い中、興味・関心を寄せて熱心に参加してもらいました。

衛生的手洗い



衛生的手洗いを、「もしもし 亀よ…」のリズムで！



細菌は、ちゃんと取り除けたかな？
細菌、結構残っているなー(*_*)

血圧測定



血圧測定・・・意外と難しい
測定値の意味も大切！！

点滴



沐浴



交流会



学生の説明はわかりやすかった。早く自分も専門的なことを学習したい

心肺蘇生



より身近に感じてもらうために、昼食会を行っています。感想には、
・リアルな意見を聴けて参考になった。
・気さくに声をかけてもらい、楽しかった。
・一人の参加だったので不安だったけど、楽しくてよかった。



インドネシア ウダヤナ大学 整形外科・外傷外科学教室からの留学生

整形外科 濱 崎 貴 彦

この度当院での第10回K-INT開催(10ページ参照)に先立ち、インドネシアはバリ島にある、ウダヤナ大学整形外科・外傷外科学教室より3名の整形外科研修医(Drs. Yudhi, Zai and Fery)が来日されました。これは5年前の第5回K-INTにて、ウダヤナ大学整形外科と当院整形外科との間で締結した姉妹縁組に基づくものです。この姉妹縁組は、2015年の第8回K-INTの際に当院は整形外科のみならず病院全体との関係に発展しました。その際の調停締結書や贈答品などは外来棟2階に展示されています。その後これまでの5年間でこの締結に基づき合計37名の整形外科レジデントを留学生として受け入れてきました。

7月3日より約5週間、1週間ずつ一緒につく指導医を交代しながら、外来、手術、病棟回診等を見学しました。当然日本語は通じないため、コミュニケーションは英語を用いて行いますし、毎週月曜日や金曜日に行っている当科の術前、術後カンファレンスも英語で行われます。当科としては受け入れが5年も経過してきて、若干マンネリ化しているところもありますが、異なる医療環境で母国語も異なる中、当院をわざわざ訪ねてきてくれることは非常に光栄に思います。もちろん語学的重要性を感じるところもありますが、積極的に心を開いて交流すること、自分が伝えたいと思ふ時間を取って相手の方を向いて伝えようとすることの重要性を改めて実感します。こういうことは初期研修医や若手のスタッフ方々は、早い時点で経験(early exposure)しておくべきだと思います。一旦自分の中の垣根が下がると、今後のことが非常に楽になります。

この姉妹縁組は、引き続き双方の医師・スタッフの間で続いてくものと思います。今後はわれわれの側からのバリ島訪問も検討されることになるでしょう。というか是非行ってみたいですね、バリ島！このような密度の濃い交流に皆さんも積極的に関与して頂ければと思います。両国間の交流により、臨床に役立つ知識を共有しつつ、ともに討論し合うことで、国際医療人育成につながり、ひいては呉地区の医療に貢献できるものと思います。当センターの運営方針の一つである国際医療協力が病院全体のみならず、各科レベルでも実を結び花開きつつあ

る証拠でしょう。これからも友好かつ建設的な関係が構築できるよう、実績を残していきたいものです。

最後になりますが、この度、彼らの研修にあたり患者さんにはお世話になりました。また関係各位にご迷惑をおかけしたところもあるかと思ひます。この場をお借りしてお礼とお詫びを申し上げます。またこの交流には谷山院長先生、臨床研究部長山下先生はじめ当院の整った受け入れ態勢の賜物で、特に国際交流室の岸田直子さんの手助けなしでは実現していなかったものと思います。あらためて深謝申し上げます。どうもありがとうございました。これからもどうぞよろしくお願いします。



院長先生と留学生
(左から順に Fery, Yudhi (スタッフ)、院長先生、Zai, Yudhi)



修了証授与 当科スタッフと



「ボランティアイベント 山本恵美子押し花作品展」 を開催しました

ボランティアコーディネーター 大 石 愛

「これが押し花？」
そんな疑問に人々の足が止まります。
「確かに…本物の花だ」
半信半疑で近づけた顔が、ゆっくりと驚きに変わっていきます。
写真でもなく絵でもない。
「押し花」という技法によって、時間を止めた花たち。
花は、褪せない彩りと新たな居場所を与えられ、いきいきと語りかけます。
～四季を旅してみませんか～

平成29年6月22日から7月6日まで、1階廊下の白壁は、色とりどりの押し花絵に彩られました。
それは、まるで「壁に開いた小窓から、その風景を眺めている」かのよう。
そこには、「押し花」＝「色や瑞々しさを失った花」というイメージは、一切ありません。
額の中で、桜も梅も萩も、本来咲くことのない季節を生きているのです。
今回、そんな新鮮な驚きと感動を届けてくれたのは、山本恵美子さんです。

押し花絵とは、「花を絵の具のように使って、風景などを描く」ものです。
春の陽を吸い込んだ水仙の黄。
夏の夜に溶けて輝く月下美人の白。
秋の夕陽に灼かれるもみじの赤。
どれも一点ものの色と輝きをとどめています。
しかし、「絵の具のように…」と言っても、相手は自然の中に咲く花。
思うような色や形をしているわけではありませんし、量産できるはずもありません。
「だったら、それを活かす使い方をすればいい。捨てるものなんてひとつもない」
その言葉通り、どんな小さな花も虫食いのある葉も、山本さんの手にかかれば、必ず「咲く場所」を見つけてもらえます。
作品づくりは、山本さんと花の共同作業なのです。
いつもそこにあるのは、「花への愛情」と「押し花の面白さを伝えたい」という気持ち。
今回、それは確かに伝わったようです。

「何度も見に来ています。たぶん明日も…」
じっと見つめる患者さんの姿を、花は優しく見つめ返していました…

作者の山本さんは、12年間、当院の押し花展示ボランティアとして、活動を続けてきました。
しかし、数年前、がんに罹患していることがわかり、闘病を余儀なくされました。
それでもずっと「ボランティアとして役に立ちたい」という想いを持ち続けていたのです。
今回の作品展は、そんな山本さんの希望でもあり、ボランティア仲間の願いでもありました。
押し花展示は、直接患者さんに接する活動ではありません。
でも、一度に何人もの方を笑顔にすることができます。
何年か先の方に驚きを届けることだってできます。
「押し花があったから、ここでボランティアができた。作品はいつまでも残る。作品があれば、これからも患者さんに喜んでもらえる。それが何より嬉しい」
それが、山本さんが押し花絵に託した願いです。
私たちは、その気持ちを繋いでいきたいと思っています。

「これが押し花？」
これは、最高の誉め言葉です。
その驚きは、これからも長く続いていくことでしょう。
ご協力いただいたすべての方に、山本さんご家族に、心から感謝いたします。
作品が、皆さまの中に「素敵な記憶」として残っていくこと、そして、これからも多くの方に笑顔を届けられることを願って…





The 18th Annual Pediatric Meeting of National Child Healthに参加して

小児外科 鬼 武 美 幸

2017年6月21日から23日までタイのバンコクで開催されたThe 18th Annual Meeting of National Child Healthに参加させていただきました。本学会は、バンコクのクイーンシリキット小児病院（QSNICH）の主催するもので、当院からは小児科・産婦人科・小児外科が毎年、順にその参加している学会です。私の他に研修医の松本千奈実先生、小児病棟から西綾乃看護師、産婦人科病棟から森友里恵看護師の計4名で参加させていただきました。派遣が決まったときには、私自身国際学会での発表は久しぶりで多少の緊張感がありました。しかし、予演を行った際に谷山院長よりQSNICHの方などの参加者との交流をしっかりとってくるように、とのお話もありコミュニケーションを取って楽しむことにしようと思えることができました。

前日20日にバンコクに到着し、その日は夕食のために外出し、翌21日から学会スタートです。昨年のK-INTにいらっしゃっていた先生に気さくに声をかけていただき気分もほぐれ会場入りすることができました。オープニングの講演を拝聴し



レセプションパーティーで
QSNICH 院長と

た後、午後からはワットプラケオやワットポーなどバンコク市内の主要な観光地を巡り、夕からはレセプションパーティーに参加しました。パーティーでは、新たに就任されたQSNICHの院長に、谷山院長からの手紙とお土産を手渡し、その後お話しをする機会を持てました。その後はQSNICHの先生方の余興を楽しみ、他の施設の方と交流することができました。

22日は朝からバンコクに車で1時間ほどの位置にあるAncient Cityという施設に学会主催のツアーで行きました。ここはタイ全土の歴史遺産や遺跡、寺院、建築物などをミニチュアにしたところです。数時間でタイ全土を巡ることができるという意味ではお得な観光スポットかもしれません。また、このツアーには四国こどもととの医療センターからも先生や看護師が参加されており親睦を深めることができました。夜はこちらも学会主催のディナーに参加しました。アジアティーク・ザ・リバーフロントというナイトマーケットやレストラン、ムエタイショーもある複合施設にある人形劇を見せるレス

トランで食事をしました。1体の人形を3人で操り、頭や手の動きなど巧妙で食事とともに楽しむことができました。



学会会場入り口にて

翌23日はいよいよ発表でした。ポスターセッションから開始したのですが、一度に複数か所でセッションが始まるという予想していなかった事態に。バタバタと重なりながら立て続けの発表になりましたが、予演の際の院長先生からの指摘に対し発表の練習を重ねた成果で、西・森両看護師とともに発表の際にはポスターを示しながら堂々とプレゼンテーションでき、その後の質疑応答にも対応できていました。松本先生の発表は特に質疑応答が白熱したようでした。今回の出張を通して4人の中で唯一前日からやや体調を崩していた中、立派に発表されていました。私自身は、「Abdominoscrotal hydroceleに合併した横紋筋肉腫の1例」というケースレポートを発表しました。非常に稀な症例でしたが、いくつか質問もいただき無事終了しました。午後からはQSNICHの病院見学に行きました。NICU、PICUのほかにsurgical ICUも備えているとのことでした。また、新外来棟は各診察室が非常に広い他、各階に会計と薬を渡す場所が設置しており、患者さんには非常に便利な施設となっていました。

今回の学会が決まり、最初は団長として参加することに不安もありましたが、終わってみると楽しい思い出ばかりでした。3日目のツアーは毎年行先が変更になるようなので、機会があればまた参加できればと思います。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった谷山院長、山下臨床研究部長、QSNICHとの連絡ほか大変お世話になった国際交流室の岸田様をはじめとする関係者各位に感謝申し上げます。



ワットポーにて



呉市総合防災訓練に当院DMATが参加しました。

企画課 契約係 宮 田 健 汰

平成29年8月18日（金）に呉市阿賀の阿賀マリノポリス地区にて開催された呉市総合防災訓練に当院DMAT（※1）チーム（医師1名、看護師2名、業務調整員3名）が参加しました。

※1 DMAT・・・災害派遣医療チーム Disaster Medical Assistance Team の頭文字。医師、看護師、業務調整員（医師・看護師以外の医療職及び事務職員）で構成され、大規模災害や多傷病者が発生した事故などの現場に、急性期（おおむね48時間以内）に活動できる機動性を持った、専門的な訓練を受けた医療チーム。

この訓練は、地震による津波・土砂災害の複合災害による被害が発生したことを想定し、防災関係機関及び民間協力団体の連携に重点を置いた実践的なもので、防災体制の一層の充実強化、応急対策の機能向上を図るとともに、市民の防災意識の高揚、防災関係機関の相互協力体制の確立をめざして、各防災関係機関（警察、消防、自衛隊、行政、医療機関、各関係団体等）が参加し、例年実施されております。

当日は、呉市医師会病院・中国労災病院・呉共済病院・済生会呉病院・自衛隊呉病院・マッターホルンリハビリテーション病院・木村眼科内科病院、など多数の医療機関DMAT及び医療救護班と共に活動しました。

倒壊した家屋から、レスキュー隊によって救出された負傷者など、次々と運ばれてくる負傷者に対し、迅速なトリアージ（重症度によって治療の順番を決めること）を実施するとともに、適切な救護を行い、現場では処置が難しい重傷者を近隣の医療機関へ搬送するなど参加機関が連携を図りながら実践しました。

当院DMATは、医療救護所指揮本部の統括として、①現地指揮本部の立ち上げ、②参集した他施設DMAT及び医療救護班の役割分担決定、③情報収集・発信、④円滑に被災傷病者を救出救護するため各防災関係機関との連携調整、⑤被災傷病者の搬送の優先順位決定、などの任務にあたりました。

実際の災害では、病院内においても建物の倒壊や火災、ライフラインの障害、入院患者やスタッフの負傷など相当の困難が想定され、指揮本部業務は難航を極めるものと思われます。混乱を最小限にとどめ、スムーズに診療を進めるためにどのように調整するか、常日頃から対策を考えておく必要があると改めて認識させられた一日で



呉市総合防災訓練参加メンバー
医 師・・・岩崎 泰昌
看 護 師・・・大西 奈津紀 濱本 龍
業務調整員・・・中元 大 渡邊 光 宮田 健汰



当センターと中華人民共和国・首都医科大付属世紀壇病院（北京市）との姉妹縁組締結について；内視鏡治療の技術提供に向けて

消化器内科医長・内視鏡センター長 桑井 寿雄

2017年7月12日、当院にて中華人民共和国の首都医科大付属世紀壇病院（北京市）と当センターの姉妹縁組締結（MoU）式典が開催されました。2016年に首都医科大付属世紀壇病院から当センターで内視鏡治療を学びたいと申し入れを受けたことから交流が始まりました。本年度は当センターの医師団が首都医科大付属世紀壇病院へ出向き、内視鏡手術のライブデモンストレーションや講演会など技術提供を行いました。このたび、より交流を深めるため姉妹縁組の提携を行うこととなりました。

首都医科大学付属世紀壇病院は、1915年に設立され、医療、教育、研究に力をいれている歴史ある病院です。ベッド数は1100床以上、従業員2,300名以上が在籍している北京でもっとも大きな病院のひとつです。

本邦の消化器内視鏡分野における診断・治療技術は世界最先端です。その技術と知識を所謂「内視鏡発展途上国」に提供することで、早期発見、早期治療が可能となり、世界中の患者さんを救うことへ寄与できると考えています。また中華人民共和国は人口が多いのと比例し、潜在的な患者数は膨大であると考えられます。当施設のみではとても集積することができない新たな臨床研究も共同で行うことにより完遂可能となります。

最後になりますが、本姉妹縁組の提携において多大なご支援をいただきました谷山院長、山下臨床研究部長、提携先である首都医科大付属世紀壇病院の呉副院長、および関係者の皆様に心から感謝を申し上げますとともに、今後もこのような交流が続くことを祈念いたします。



写真1 首都医科大学付属世紀壇病院とのMoU記念品交換



写真2 MoU関係者記念撮影

うちの部署の接遇キラリさん



看護部 8A病棟
事務クラーク

山口 晴香さん

本人のコメント

『患者さん第一』を意識し、不安を抱えた患者さんの心に寄り添えるような丁寧な対応を心掛けています。

職場長からのコメント

8A病棟 藤田 看護師長より
いつも笑顔の山口さん！忙しくても慌てずテキパキ動き、安心して業務を任せられ、患者さん・スタッフから頼りにされています。



企画課
契約係

木谷 朱里さん

本人のコメント

契約係には多くの方にお越しいただいています。精一杯対応させていただきますので、よろしくお願いいたします。

職場長からのコメント

徳臣 企画課長より
契約係は病院職員以外に取引会社の担当者と接することがとても多いですが、いつも笑顔で丁寧な対応が素晴らしいです。



看護部 手術室
看護師

池田 ひかるさん

本人のコメント

患者さんと関わる時間は短いですが、少しでも安心して手術に臨むことができる環境が提供できるよう心がけています。

職場長からのコメント

手術室 荒井 看護師長より
いつもやさしい笑顔と声で患者さんやスタッフに接しています。彼女の笑顔が手術室を明るくしています。



ME管理室
臨床工学技士

岡野 慎也さん

本人のコメント

チーム医療の一員として、安心・安全な医療機器および臨床技術の提供が出来るよう、日々知識の習得や技術の向上に努めることを心がけています。

職場長からのコメント

原 臨床工学技士長より
ME管理室の業務は臨床業務や保守管理業務と多岐に渡りますが、他職種の方への気遣いも忘れず、常に現場の雰囲気が悪くならないよう努力している姿が印象的です。

私たちモデルナースです

☆5B病棟 池田 侑香☆

モデルナースに選んでもらい、うれしい反面さらに責任感がわいてきました。急変も多くあり忙しい病棟ですが、忙しさに囚われず患者さんのこと、周りのスタッフのことを考えながらこれからも、笑顔を絶やさず、仕事をおこなっていきたいと思います。



♥7A病棟 足達 真紀♥

患者さんから安心と信頼を得られる看護師を目指し、笑顔を忘れず、丁寧な説明と傾聴の姿勢に努めています。また、病棟スタッフに対しても思いやりの気持ちを持って接するように心掛けています。これからもたくさんの事例を学び、確かな知識や根拠に基づいた看護を提供できるよう積極的に仕事に取り組んでいこうと思います。



♪外来 岡田 優子(消化器内科)♪

外来では診察後に患者さんに検査や入院説明等をしています。患者さんの中には高齢の方や呉医療センターが初めての方もあるので、検査が安心して安全に行えるように、わかりやすい言葉で説明し笑顔で対応するようにしています。待ち時間が長くなるときは声掛けをして、患者さんの気持ちを配慮するように心がけています。



♫8A病棟 藤井 静香♫

私は、患者さんや家族に対し、笑顔で丁寧に接するように心掛けています。外科病棟へ異動になり2年目で、周術期の看護についてはまだまだ未熟ですが、患者さんの手術に対する不安が少しでも軽減できるような関わりを続けて行きたいと思います。また、後輩指導において、相談しやすい雰囲気を作れるよう頑張っています。



☆10A病棟 保岡 さとみ☆

患者さん、ご家族が心穏やかな時間を過ごしていただけるよう、ひとつひとつの出会いを大切に関わらせていただいています。最期の時間が近づくとつれどう接したらよいのか悩むこともありますが、みんなに支えてもらいながら頑張っています。柔らかな雰囲気で相手がほっとできる時間が持てるよう努めていきたいと思っています。



♥5A病棟 野村 愛味♥

患者さんと関わる上で私が大切にしていることは常に笑顔で接することです。回復期でもある5A病棟では多くの患者さんがリハビリを頑張っています。私たちの声かけや関わりが患者さんの励みになるように、病棟スタッフで良い雰囲気を作っていけるようにしていきたいです。



♪6A病棟 住吉 麻弥♪

日々の看護のなかで笑顔と思いやりを大切にしています。笑顔で患者さんや家族に寄り添い、言葉使いや態度も含めて、自分だったらどうしてほしいか、自分がされたらどう思うか、といったことを意識するように心がけています。言葉にできない患者さんの思いをくみとり、受け止めることができるよう日々努力していきたいと思っています。



♫9A病棟 平田 哲典♫

私は常に患者さんに対して礼儀正しく親身になって接することを心がけています。患者さんが安全安楽に療養生活を送ることができるように、患者さん一人一人に合わせた関わり方をしています。これからも関わった人が笑顔になれるように、精神誠意心のこもった看護をしていこうと思います。



モデルナースとは、
「こんな看護師になりたいと憧れる人」
「笑顔のすてきな人」
「何事にも意欲的、積極的に頑張っている人」
を基準に、各部署から選出されたキラリと光るステキなナースのことです。





誕生日ケーキで患者さんを笑顔に

栄養管理室 栄養士 高須賀 麻美

栄養管理室では緩和ケア病棟の患者さんに誕生日ケーキの提供を行っており、今年度は5名の患者さんに実施しています。

誕生日ケーキは、病棟から依頼を受けてから準備が始まります。誕生日ケーキのトッピングに使う果物は、栄養士が患者さんへ好きな果物の聞き取りを行い、その後調理師と相談して決定します。誕生日ケーキはサプライズで提供されるので、患者さんへ果物の聞き取りを行う際には不自然さが出ないよう、普段の食事相談と同じ流れで行うよう気を付けています。また、調理師とは使用する果物の種類だけでなく、嚥下機能を考慮して切り方も検討していき、その患者さんに合ったケーキを提供できるよう努めています。

実際に提供した3名の患者さんの例をご紹介します。

1人目は、トッピングの果物に工夫をした患者さんです。スイカとメロンを好まれていましたが、水分が多く、ケーキのトッピングには向きませんでした。ですが、何とかこれらを提供できないか調理師と相談し、スイカとメロンは少し早めに切ってペーパーでできるだけ水分を除き、提供の直前に盛り付けるという対応を行いました。結果、患者さんには「好きな物ばかり！」と喜んで頂け、ご家族からは「こんなケーキ見たことがない」というお言葉を頂きました。翌日食事相談に伺った際にはケーキのことを熱心にお話しされ、さらに1週間後に食事相談に伺った際にも誕生日会のことについて嬉しそうに話して下さり、笑顔が増えたように感じました。



2人目は、誕生日2日前に転棟されてきた患者さんです。誕生日ケーキの準備には1週間程度かかるため、この患者さんはケーキの用意が間に合いませんでした。そこで誕生日ケーキの代わりに提供できるものを調理師と話し合い、急遽ワゴンサービスで提供する手作りデザート「ヨーグルトムースゼリーのせ」をこの患者さん用にアレンジして提供することになりました。ワゴンサービスとは、栄養管理室で毎月取り組んでいる、調理師による手作りのデザートを提供するイベントです。この患者さんには器を替え、メッセージクッキーを載せて提供しました。ケーキではありませんでしたが、患者さんは驚きつつもとても喜んでくださいました。



3人目は、嚥下機能が低下した患者さんです。病棟より誕生日ケーキの依頼がありましたが、スポンジケーキではない方が良いと判断し、調理師と相談してババロアでの提供を行いました。トッピングには口の中ですぐ崩れるよう缶詰の桃を使用し、調理師がバラ型に飾りました。普段寝ていることが多い患者さんでしたがこの日は笑顔が見られ、ババロアでの提供にご家族にもとても喜んでいただけました。



今後も患者さんに喜んで頂けるよう、そしてより患者さん個人に合った誕生日ケーキが提供できるよう、調理師と共に頑張っていきたいです。



佐々木内科・呼吸器科クリニック

副院長 佐々木 啓介

当院は平成3年に院長:佐々木英夫が国立呉病院(現:呉医療センター)を退職し開設いたしました。

平成29年5月からは小生が副院長として着任致しました。当院の場所は呉医療センターより徒歩約10分、呉本通り3丁目バス停より徒歩1分の場所にあります。

このたび開設25年が経過したため平成28年5月に施設の改築工事を行い全面リニューアル致しました。内装は床材、扉、診察台などはすべて木材をすることで温かみを出しております。また患者さんのプライバシーに配慮した個室タイプの診察室に切り替えました。機器に関しましても東芝製の最新16列CT、超音波装置、オリンパス製経鼻胃ファイバーを導入しました。専門科である呼吸器に関しましても胸部写真に追加してCT、肺機能検査、IOS、呼気NO検査も行っており、それらの情報を統合する電子カルテも導入致しました。

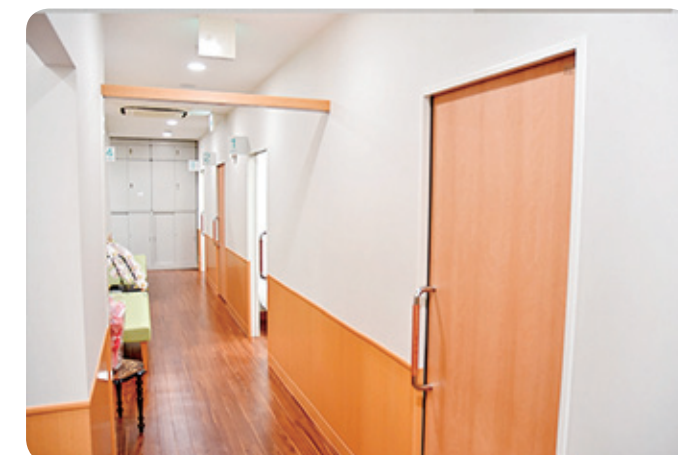
機器のみならず患者さんへの教育にも力を入れており、喘息・COPD患者さんへの専用ブースでの吸入指導や糖尿病患者さんへの日本糖尿病療養指導士の資格を持ったスタッフによる個別療養指導、インスリン自己注指導、フットケア指導、褥創ケアを行っております。またスタッフ教育も力を入れており、スキルアップのための院内勉強会なども定期的に行っております。

当院では専門科である呼吸器のみならず糖尿病、生活習慣病、認知症などの内科一般診療や骨粗しょう症や検診などの業務なども行っております。また開設当初から緊急往診や訪問診療なども積極的に行っており入院が必要な場合は呉地区の急性期病院と連携を行っております。

特に呉医療センターとは「波と風ネット」によるカルテ情報の共有により利便性の向上、迅速な紹介を心

がけております。呼吸器疾患のみならず訪問診療が必要な患者さんがいらっしゃいましたら、気軽にご相談いただければと思います。

院長の佐々木英夫は国立呉病院(現:呉医療センター)に昭和51年より平成3年まで15年間、小生が平成26年から27年まで2年間呉医療センターに勤務させていただきました。このご縁も含めて当院と呉医療センターが今後も密接に連携させて頂きたいと考えておりますので、今後ともよろしく御願い致します。



医療法人 佐々木内科・呼吸器科クリニック

〒737-0032 呉市本町4-1

電話: 0823-21-7373

FAX: 0823-21-7384

HP: <http://sasakiclinic-kure.com/>

休診日: 木曜日午後、土曜日午後、日・祝



がん相談支援センターの紹介

地域医療連携室 がん相談支援センター 看護師 林 俊 美

【がん相談】

当院のがん相談支援センターは、院内外問わずどなたでも利用ができ、看護師や社会福祉士が電話や面談で対応させていただいております。

相談の内容として「治療をする事を先生から聞きましたが、本当にその方法しかないのでしょうか。セカンドオピニオンを受けるというのは、今診てもらっている先生に対して失礼になるんじゃないですか。先生の機嫌が悪くなって、今後診てもらえなくなるんじゃないですか。」と言われることがあります。このように納得して治療をするための方法であるセカンドオピニオンが、不安の材料になっている場合があります。このような時は、お話を聞かせていただき、セカンドオピニオンについて分かりやすく説明を行っています。

セカンドオピニオンとは、診断や治療方法について、担当医以外の医師（他病院）に意見を聞くことです。別の医師の意見を聞くことで、患者さんがより納得のいく治療を選択することを目指します。担当医を替えたり、転院したりすることだと思っている方もいらっしゃいますが、それが目的ではありません。

担当医から説明された診断や治療方針について、納得のいかないこともあるかもしれません。「別の治療法はないのか」という場合もあるでしょう。セカンドオピニオンを受けることで、担当医の意見を別の角度から検討

することができます。もし、同じ診断や治療方針が説明された場合病気に対する理解が深まることもあります。また、別の治療法が提案された場合には選択の幅が広がることで、より納得して治療に臨むことができます。

セカンドオピニオンを受けた後は、その意見を参考に担当医と再度、治療法について話し合うことが大切です。

セカンドオピニオンは自分らしく納得できる選択をするために大変有用な仕組みです。

お悩みの際は、是非ご相談ください。

【患者サロン】

今年度の患者サロンは、各回テーマが決まっており、テーマに添った専門医や他の専門医療職から講義をしてもらう勉強会スタイルとなっております。

講義が終わった後、質問タイムもありますので不安の解消や今後の自分の生活に役立てていただけることと思います。院内外問わず、関心のある方は是非ご参加ください。予約、参加費は不要です。



開催場所：外来棟4階

開催時間：14:00～15:00

患 者 サ ロ ン（がん、乳がん、オストメイト）一 覧			
10月 	11日（水）	「私の心づもり」として文書に残すこと ～ACPでああなたの希望や思いが医療ケアに反映されるために～	吉川幸伸医師 （よしかわ医院院長）
	26日（木）	治療中の日常生活について	がん化学療法認定看護師
11月	10日（金）	感染予防について	感染管理認定看護師
12月 	8日（金）	遺伝子検査、治療について	外科医長 檜井孝夫医師
	21日（木）	ストーマ周囲皮膚トラブルへの対処方法	薬剤師
平成30年 1月	11日（木）	乳がんのリンパ浮腫予防	リンパドレナージュセラピスト（看護師）
	12日（金）	体力作りやストレッチの方法	理学療法士、作業療法士

※色分け **がんサロン** **乳がんサロン** **オストメイトサロン** を示しています。



緩和ケア認定看護師の活動を紹介します

10A病棟（緩和ケア病棟）

和田 かおり
（緩和ケア認定看護師）

緩和ケアとは、主にがん患者とその家族を対象にQOLを維持・向上させるために身体的・精神的・社会的・霊的な痛みを緩和、または予防するためのアプローチのことです。

私は平成21年に緩和ケア認定看護師の認定を受けました。現在、10A病棟（緩和ケア病棟）で勤務しながら、月2回の緩和ケアチームに参加し、病棟ラウンドを行っています。



【緩和ケア病棟】

緩和ケア病棟では、症状緩和をして自宅に戻られる方や、人生の最期を迎えられる方が、その人らしく尊厳をもって過ごせるように、看護をしています。医師や看護師だけでなく、理学療法士や薬剤師、臨床心理士、栄養士、ボランティア、そして患者さんご自身やそのご家族と協力して、つらい症状が少しでも楽になり、よりよい時間が持てるように取り組んでいます。例えば、痛みがある患者さんの観察を丁寧に、痛み止めについて話し合ったり、マッサージを行ったり、つらい思いを聞いたりして、痛みの緩和をしています。



【患者と向き合う緩和ケア認定看護師】



ボランティアによる生け花

又、緩和ケアチームの病棟ラウンドでは、疼痛や呼吸困難がある患者さんの症状緩和に関することや、病棟看護師のケア相談など、患者個々へのアドバイスをしています。

認定看護師には「実践」「指導」「相談」という3つの役割があります。3つの役割を通じて、自分自身の看護も磨き、緩和ケア病棟だけでなくどこでも緩和ケアが実践できるよう看護師の育成にも取り組んでいきたいと思っています。



【緩和ケアチーム】

— 呉医療センター・中国がんセンターの行事紹介 —

呉医療センター・中国がんセンター

メディカルフェスタ 2017

LOVE & SMILESで広がる 地域の医療

平成 29 年
9/30
10:00-14:30
入場無料 **土**

- がんなどの最新医療についての講演会 11:00-12:00
- TOMO ミニコンサート 12:10-12:50
- 最新医療についての講演会 13:00-14:00

無料診断、内臓腫瘍外科手術体験など楽しいイベントがたくさんあります。

主催・会場：国立病院機構 呉医療センター・中国がんセンター（呉市青山町3-1）TEL.0823-22-3111 <http://kure-nh.go.jp> 後援：呉市

がんを知り、がんの克服を目指す

～がん予防と治療の最前線2017～

11/12 (日)
12:00開場/12:50開演(16:00終了)

●とき 平成29年
●ところ 呉市文化ホール
呉市中央3丁目10-1

お申込み
先着1600名様
無料で招待
(自由席)

ご来場者様へ
エコバッグプレゼント!

第1部
13:05～14:15 講演
がん予防と治療の最前線

胃腸外科治療の最前線 外科医長 鈴木 宗久	高精度放射線治療 放射線腫瘍科科長 幸 慎太郎
家族看護 看護部長 小杉 恭子	がんと心をつなぐ ～サイコオンコロジーの立場から～ 精神科医師 大盛 航

第2部
14:25～14:55 癒しのサウンドブレイク
ヴァイオリン・ピアノ演奏

ヴァイオリニスト 内山 優子
ピアニスト 賀宮 美幸

第3部
14:55～15:55
仁科 亜季子さん講演
「がん経験者として伝えたい事」

■応募方法/先着1600名様に、ご招待ハガキをお送りします。ご招待ハガキは、おひとりにつき一枚必要です。ご招待ハガキをご希望の方は、希望者全員の①氏名②郵便番号・住所③電話番号を明記の上、ハガキ・FAX・メールのいずれかに右記事務局までご応募ください。
※ご記入いただいた個人情報は、ご招待ハガキの発送と、当医療センターが今後実施するイベントのご案内のみに使用させていただきます。
※抽選ではありませんので複数応募いただく必要はありません。

■応募期間/平成29年9月11日(月)～平成29年11月7日(火)必着

■応募先/「がんを知り、がんの克服を目指す市民公開講座2017」事務局
●ハガキ：〒737-0023 広島県呉市青山町3番1号
●FAX：(050)1267-8657
●メール：kure-shiminkouza@wands-sp.co.jp
(※名称「がんを知り、がんの克服を目指す市民公開講座2017事務局」としてください)
■問い合わせ/TEL (050)1332-5419 (受付：10時～17時※土日祝を除く)

●主催/独立行政法人 国立病院機構
呉医療センター・中国がんセンター
〒737-0023 広島県呉市青山町3番1号
TEL(0823)22-3111(代)・FAX(0823)21-0478

●共催/呉市
●後援/呉市医師会/呉市薬剤師会/中国新聞社/
NHK広島放送局/広島テレビ/中国放送/
FMちゅービー/広島エフエム放送/
広島ホームテレビ/テレビ新広島(協賛)

<呉医療センター・中国がんセンター>は、地域がん診療連携拠点病院として、地域のがん医療の向上に取り組んでいます。

呉医療センター <http://www.kure-nh.go.jp>

呉医療センターへご寄付をいただきました。

4/1～6/30の間にご寄付を センチュリーメディカル株式会社、呉市医師会
他匿名2名からいただきました。

当院において患者さんのために使用させて戴きます。ありがとうございました。

編集後記

表紙の「押し花絵」は、当院でボランティアとして活動してきた山本恵美子さんの作品です。
残念ながら、山本さんは、7月15日に旅立たれました。私たちにかけがえのない想いと、素晴らしい作品を残してくれた山本さんのご冥福をお祈りいたします。
山本さんの想いのつまった作品連ですが、今号から、数回にわたり表紙を飾ることになりました。
作品を通して、季節を感じていただければ幸いです。
なお、17ページには、「ボランティア 山本恵美子押し花作品展」の記事を掲載しております。
こちらもぜひご覧下さい。

ボランティア一同